



UU now

発行：宇都宮大学 編集：広報室
〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350
TEL 028-649-8649 FAX 028-649-5026
URL <http://www.utsunomiya-u.ac.jp>
E-mail plan@niya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

Vol.18

自分に誇りを持つ

OB INTERVIEW 普通のあるべき姿はどうあるべきか



株式会社東芝 執行役常務
電力システム社 社長

五十嵐 安治
Igarashi Yasuharu

【いがらし・やすはる】1952年福島県生まれ。75年宇都宮大学工学部機械工学科卒業、株式会社東芝入社。03年電力・社会システム社事業開発推進統括部長。06年電力システム社原子力事業部長。08年電力システム社社長。

東京ベイエリアに築かれた近代都市。その眺望が見事な東芝本社ビルの一室。五十嵐安治さんは緊張気味の学生を前に、世界を相手にするビジネスの「ま」た懐かしい学生時代の思い出を、穏やかな口調で語り始めた。

（取材／大学院工学研究科1年・村田大誠、同・渡邊泰之）

■自分の想いと仕事観
大学卒業の年、1975年は、オイルショックの影響で厳しい経済情勢にあった。入社早々、1カ月の「自宅待機」を命じられた。しかし、いまは「僕の歩んできた道は、すごくラッキー

とわれ焦った」ことを記憶している。配管の配置設計やプロジェクト管理などを担当。以来、長年、原子力事業に携わってきた。

「アンチ原子力」という風潮の中にあつて、社会インフラの整備を担うことへの自負があつた。「オイルショックの時は、国民がトイレットペーパーの買占めに奔走するという異常な時代だった。そういう社会環境もあつて、世の中に役に立つ仕事

があつて、世の中に役に立つ仕事をしたかった。昨年オイルが急騰しても大きな混乱はなかった。それは、備蓄したり、原子力発電の比率が高くなっているからです。30年前だったらとんでもないことになつていた。社会インフラを支える仕事は、どこの国にとつても大事なことです。私が幸運だつたと思うのは、社会貢献が東芝の大きな理念になつてきたからです」。

■人間性が何よりも大切
原子力発電所は、建設に10年、運転期間が60年と言われている。建設からメンテナンスまでを含めると70年という長い付き合いとなる。「予算と工期をきっちり守る」日本の原子力技術は世界から高く評価されているという。

「普通は会社員生活は約35年です。2世代で原子力発電所に関わることになりません。取引先も、長い目で見るし、その場その場じゃないということですね。そういう意味でお客さまに信頼される会社になるためには、会社の一人ひとりが信頼される人間になることです」。

■大学でよき仲間と出会えた
大学では機械工学を専攻した。「間口が広い学問で、好奇心を持って取り組めば、いろいろなことに繋がっていくような気がした」。

工学部の陽東キャンパスまでは峰キャンパス近くのアパートから単車で通った。「正門からすーっと行つたところにアパートがあつた。角にタバコ屋があつた。2階建てで、上下に6部屋ずつあつた」。学生時代の思い出がいっぱい詰まつたアパートの記憶は鮮明だ。対面の部屋にいた友人は商社マンとなり、今でも仲良く交流を続けている。マージャンに興じるのも、鍋を囲み記憶がなくなるまで飲み明かしたのもアパートの一室だった。「お金がなくなつても、（送りの日が違うので）仲間の誰かが持つていた。あのころは、何にもなかつたけど、楽しかった」。

50歳を過ぎ、一時途絶えていた当時の仲間との交流が再開した。タイに赴任している友人のところへみんなで遊びに行つたことも。「よき仲間と出会えたことが一番の思い出。大学には、会社とまったく違った世界がある。何の利害関係もないときに友人とたくさん話をし、いろいろなことをするのが大事なよう

（文・ピオス編集室／撮影・木原悠葉）

ネイチャーフレンド 子どもと一緒に自然の中へ

環境教育を実践する市民団体「自然教室ネイチャーフレンド」(事務局・宇都宮大学教育学部陣内研究室)にサークルとして加盟。子どもたちと一緒に自然を体いっぱいを感じる体験を通して自然の不思議さ、面白さを伝える活動をしている。宇大のメンバーは、ジュニアレンジャー会員と呼ばれる小学4年生から中学3年生の子どもたちのお兄さん、お姉さんという立場で「自然と子どもたちのつなぎ役」となる。

学生自身も、子どもと一緒に自然の中に身を置くことで、忘れていた感動や好奇心を蘇らせる。

学生部長の白石悠太さん(教育学部3年)は「自分たちが携わった企画に子どもたちが熱中し楽しんでいる姿を見るとうれしい。社会人スタッフからは学生時代と社会に出てからの意識の違いなどの話を聞いて、ためになる」と話す。



大学祭では、「ネイチャーフレンド」の模擬店に、自然教室の子どもたちが遊びに来てくれるという。「久しぶりに会う子が声変わりしたり、身長が伸びたり、成長した姿を見ると、自分は、あのような年頃のとき何をしていたのか、そんなことを考えるんです」。



環境ISO学生委員会 学生主体で環境への 取り組みを改善

「教職員と学生、その他のステークホルダーの協働によって、宇都宮大学を持続可能な低炭素社会形成に向けたリーディング・ユニバーシティとすること」を目的として発足。

委員長の中和徹也さん(大学院国際学研究所1年)は「環境保全活動において、教職員・学生が一体となって相乗効果を生み出し、大きな流れを作りたい」と話す。

委員会の働きかけは大学側を動かし、学生と教職員による協働プロジェクトチームが発足、学生の意見を反映した全学的な環境取組への提言がまとめられた。現在は、大学組織であるEMS(環境マネジメントシステム)構築部会に参加し、教職員と対等な立場で学内での取り組みについて意見交換をしている。

「ふだんの勉強やサークル活動などで得た知識は、既に社会貢献につながるようなものがある。それをアウトプットする先が地域であれば、それは地域貢献になる。リサイクル弁当箱であればスーパーなどに呼びかけることは可能。省エネも、学内の施設でできたものは他の大学でもできる。宇大を実験の場としてできあがったものを地域に還元していければ」と中和さんは話す。



■メモ
EMSのほかに、リサイクル弁当箱の導入など「R(リデュース・リユース・リサイクル)」「S(省エネ)」「E(再生可能エネルギー)」「G(再生可能エネルギー)問題に学生の視点で取り組む。

さとびと 棚田の自然環境を守る



米を生産する場としてだけでなく、その様々な機能や文化的価値が注目されている棚田。「さとびと」は、この棚田の自然環境を守るため、茂木町甲、竹原両地区の「棚田のオーナー制度」に参加。田植えから草刈り、稲刈り、脱穀まで年間を通して農家の人たち、オーナーである県内をはじめ首都圏在住の人たちとともに棚田の保全、米作りの活動を続けている。

代表の小林雅人さん(農学部2年)は「大学では農場実習もありますが、棚田での活動は一步踏み込んで深く農業を経験できる。普段何気なく食べているお米は、農家の方たちが一年間頑張って世話をし、苦勞して獲れたものであるということを実感できる」と話す。

3万から3万5千円のオーナー制度の参加費は、地元の農家からいただいた野菜を大学祭で販売し、その収益を充てている。今年からは、甲地区の耕作放棄地を借り受けて自分たちで栽培した5種類の野菜も大学祭で販売し、オーナー制度の参加費に充てる予定だ。

「地元では『若者がいない』という嘆きの声を聞く。私たちが行ったときに、10年ぶりに若者を見たと言ってくれた。オーナー制度の活動はもちろんですが、これからは、農家側の視点に立って、一緒に活動を考えていきたいと思う」。



■メモ
顧問の原田淳農学部准教授が学生を誘って農家の手伝いを始めたことがきっかけでサークル活動に発展。収穫祭ではオーナーに30キロの精米が配られる。

LOMO 環境問題で学内を刺激したい

農学部森林科学科4年の有志が、卒業論文提出から卒業までの期間を利用してガレージセールを開いたことがサークルの始まり。卒業を控えた4年生から不用となる家具・備品を無料で引き取り、新入生や留学生に安価で提供する。毎年3月初めから4月初めまでの1カ月間、峰キャンパスの部室前で開く。

2つ目の活動は、キャンパス内での出る飲料水の紙パックの回収。峰、陽東キャンパス内6カ所に回収箱を設置。集まり次第、メンバーが洗浄・乾燥し専門業者に引き渡す。

3つ目は、ガレージセール、紙パック回収の収益を利用して、大学祭で使う割り箸を外国産から間伐材を使った国産に切り替える活動を昨年「宇都宮大学環境ISO学生委員会」と協働で取り組んでいる。

代表の山路貴大さん(農学部3年)は「LOMOの名称には、地域を刺激していこうという想いが込められていますが、学外の活動はきちんとした体制ができてから。いまは、学内の学生や大学側をいかに刺激していけるかを考えています。何年後かに、『宇大の環境問題への取り組みは凄い』、

そう言われるようになれば、私たちのいまの活動も無駄にならない」。



■メモ
「LOMO」はLocal Motivationの略。ガレージセールでは、冷蔵庫や洗濯機の人気が高く、売れ残ったものは翌年に廻す。

CAMPUS

KAKEHASEEDS NGOと連携し海外協力

NGO「シャプラニール=市民による海外協力の会」の地域連絡会である「シャプラニールとちぎ架け橋の会」の会員だった宇大生の有志が設立。架け橋の会と連携し、バングラデシュの手工芸品などフェアトレード商品の販売や、国際理解ワークショップを開催している。

学生サークルができたことで大学祭にもフェアトレード商品の店を出すようになり、地域での活動の幅が広がった。宇大の新入生歓迎プログラムでは、ゲーム感覚で世界の食糧格差を体感するワークショップを開いた。

KAKEHASEEDS（カケハシーズ）独自の活動も増え、その代表的なものが、一昨年初めて開催した「難民映画祭」だ。今年度は、テーマを「難民問題」に特化せず幅広く国際問題を扱うイベントを企画した。

メンバーは、サークル外の活動にも積極的に取り組んでいる。スタディーツアー等に参加し世界に飛び出していく。その体験は報告記としてまとめられる。



■メモ 「シャプラニール」は、バングラデシュを中心にネパール、インドの3カ国を支援対象としている。フェアトレード商品は、売上の利益は本部（東京）を通じて現地支援に使われる。



代表の佐藤杏子さん（国際学部3年）は「国際協力を目的に集まった仲間ですが、多様な考え方があり、そういう仲間に出会えたことが大きい。社会人に比べ未熟な点もありますが、学生だからこそできることもあるはず」と話す。

リソース・ネットワーク インドの女性の自立を支援

毎週土曜日、峰キャンパス近くにメンバーによって運営されるカフェ「Fair Trade Café Vimala」が開店する。店名は「リソース・ネットワーク」が支援するインドの女性自立のための職業訓練校の名称に由来する。



フェアトレード商品のコーヒーや紅茶、地産地消を考えての有機野菜を使ったカレーやサラダがメニューに並び、訓練校で作られたコースターやランチョンマットが使われる。

訓練校の商品は大学祭や地域のイベントで販売。その利益は現地のNGOが運営する寄宿舎への寄付と新たな商品購入の資金に。毎年、商品買い付けとスタディーツアーを兼ね、10人ほどのメンバーがインドのVimalaへ向う。現地では寄付金がきちんと使われているか、訓練校のプログラムが女性の自立につながっているか、聞き取り調査を実施した。NGOの案内でスラム街を訪ね貧困の現状を肌で感じたことも。

代表の生沼晶子さん（農学部2年）は「リソース・ネットワークの活動を通して、様々な活動をしている人を知った。このカフェでは限界集落の問題に携わる人に出会った。それぞれのグループが繋がっていけば、おもしろいことができると感じた。出会いの場をつくるためにもカフェを活用していきたい」と話す。



■メモ 国際学部の学生が卒業研究のためインドを訪れたときにVimala Welfare Centerを知り、商品を購入してきたことがサークルの始まり。カフェは、フェアトレードを広く知らせるため07年にオープン。

ナムチャイ 自ら翻訳した絵本をタイに届ける

書籍や文房具が行き届いていないタイ農村部の小学校に自ら翻訳した絵本と奨学金を贈る活動を続けている。

大学の先生や幼稚園、出身校などを回って使い古された絵本を集める。日本語の文章は国際学部の授業科目「タイ語文章表現」を履修する学生がタイ語に翻訳し、タイ語担当講師の1人である泉田スジダ先生（非常勤講師）が添削。絵本の傷や綻びの補修も学生自身が担当する。



補修の材料費などは、大学祭に出店するタイ料理の店の利益を充てる。07年からは、この利益を活用して、絵本を贈っている小学校とは別のタイの小学校に奨学金を贈っている。現地では制服や文房具の購入費のために貸し出される。

毎年3月、サークルのメンバー全員で翻訳した絵本を鞆に詰め、タイに向う。「どういう子どもたちに読まれているかを自分の目と肌で確かめる」ため、「手渡し」が伝統だ。

前述の2つの小学校は、首都バンコクからバスで8時間、タイ東北部のシーサケート県にある。村人の家にホームステイしながら1週間滞在。小学校を訪問し、子どもたちに折り紙や、あやとりなど日本の遊びを教えたりしながら交流する。

タイ訪問の責任者、佐々木まりやさん（国際学部3年）は「私たちの活動は、現地の人たちとの信頼関係の上に成り立つものです。国際協力という枠組みの中で、人間的な温かさを感じられたことが大きい」と話す。



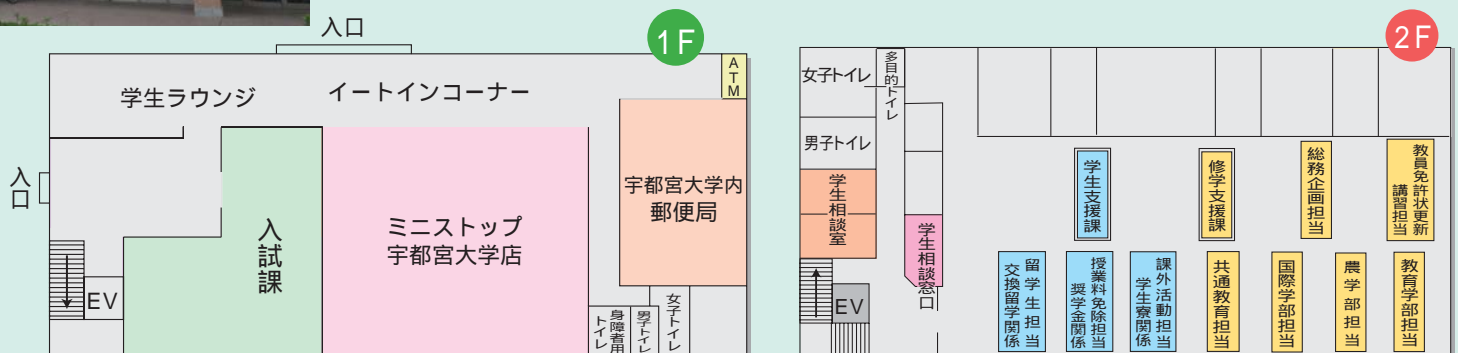
■メモ 絵本は毎年40〜50冊を贈っており、これまでに贈呈した絵本は500冊を超える。これからは、言葉に不自由する日本在住のタイ人の子どものための支援も強く考えていく考え。



複合施設OPEN!

学生・教職員に対する福利厚生施設の充実及び地域の方々の利便性の向上等を図るため、峰キャンパス構内の教育学部野洲棟北側にオープンしました。1階には、本学農学部附属農場の生産品等が販売されているミニストップ（コンビニエンスストア）のほか、郵便局、入試課があり、2階には、学生相談窓口、修学支援課学生支援課などがあります。本学関係者のみならず、近隣のみなさまにとっても便利な施設になっています。

- ・ミニストップ
- ・郵便局
- ・学務部事務室
- 修学支援課
- 学生支援課
- 入試課



地域共生研究
開発センター

センター長 石井清 教授
(大学院工学研究科 教授)

地域共生研究開発センターは「地域共同研究センター」をルーツとして満20歳を迎えます。ここでは、活動の一端を紹介いたします。

センターの概要

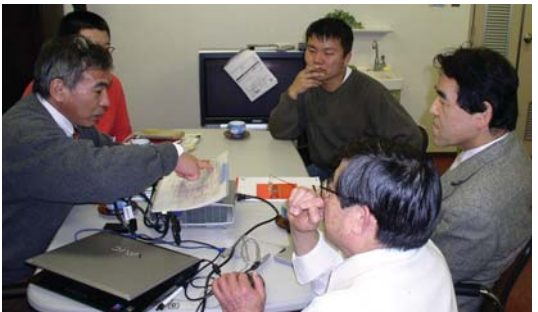
産学官連携活動の推進

宇都宮大学地域共生研究開発センターの第一の役目は、宇都宮大学教職員の研究成果知識や技術を社会の発展(特



第2回宇都宮大学企業交流会 (2008年9月26日) / 上・下

業へ向けた高度研究の推進を主任務として大きな成果を上げてきました。しかし、本学では大学発ベンチャー企業が少ない(現在3社)ことを考え、21年度からインキュベーション推進室を設置し、企業化・事業化に近い研究を支援する体制を作りました。



教員と弁理士を含めた技術相談

ベントへの研究紹介の出席、本学所有特許に関わる技術説明会や一般の方々への科学技術発信を目的とした「金曜日ブニングセミナー」の開催を行っています。

も受けられるようになってきました。また、最近、栃木県商工会連合会と本学との間で「社会連携推進に係る協定」を結び、あわせて本センターの技術相談窓口を県内39の商工会に設置しました。これは、全国的に例を見ない試みであり、すでに多くの相談案件が寄せられています。



ノムラいきいきとちぎフェア出席

に産業界の発展)に役立てるお手伝いです。具体的な仕事としては、企業と大学との共同研究の支援(教員と企業とのマッチング、契約書作成、場所の提供など)、企業からの技術相談受付と問題解決のための教員紹介、新しい製品開発に対する開発費の獲得支援、また、それらを活発にするためのネットワークづくり、各種イベントへの出席による情報発信など、非常に多くのものがあります。さらに、本学の「知的財産センター」と一体運営を行い、本学の新しい技術を知的財産として守るとともに製品開発に活かすための活動も行っています。このような大学の活動は一般に「産学連携」または「産学官連携」と呼ばれています。

員(教授、准教授、助教等)は約350名です。教員はそれぞれの専門分野について研究を続けていますので、大学には非常に多くの知識と技術が集約されていると言ってよいでしょう。そのため大学は、学生に対する教育に加え、地域社会から「知的拠点」として強い期待が寄せられています。私たちはそれに応える必要があります。知識や技術には、芸術や文学、数学や物理学、農学や工学、等々非常に広い分野がありますが、このセンターでは産業界を相手先としているため、主に工学系と農学系の分野について産学官連携活動を行っています。

ン・リエゾン部門には専任の准教授を配置し、学外との窓口として相談等のワンストップ化を目指しています。その補佐として文部科学省から派遣されている産学官連携コーディネーターを配置し、技術相談やマッチング、企業訪問などの連携業務を進めています。客員部門には、弁理士、弁護士、企業経営者、ヨーロッパ企業のコンサルタントなど経験豊かな16名の方を客員教授としてお迎えしており、技術相談、特許申請など、案件ごとに適切な対応ができるようにしています。また、事務職員3名(産学地域連携課)と事務補佐員も当センター建物内に配置して、効率化を図っています。

センターの活動

主な活動を紹介します。

(1) 技術相談の受付

技術相談は年々増加しており、平成20年度は230件ほどの技術相談を受け、その解決を図っています。

(2) 共同研究 受託研究支援

共同研究と受託研究は過去数年にわたり堅調に件数と金額を伸ばし、19年度はそれぞれ120件、45件を超えています。ただ、20年度は1000年一度と言われる経済不況のため、少し減少しました。

(3) 情報発信とセミナー

教員の研究紹介をまとめた「研究シーズ集」を茨城大、群馬大、埼玉大、宇都宮大の4大学合同で刊行し、本学の抜粋版も作成しています。また、CORDニュースという教員紹介リーフレットの出版、各種イ

学外との連携

産学官連携の推進のために学外との連携が非常に重要です。栃木県との連携は強く、いろいろな局面で県のご支援を受けるとともにセンタースタッフも県の多くの事業に協力しています。また、県内には商工会議所等を中心とした産学官連携推進組織が7つできており、センタースタッフ

が委員として参加するなどそれらの組織ともしっかりと連携をとっています。また、市や商工会議所、地元金融機関からコーディネーターの派遣

化が求められる我が国にとって、産学連携によってそのような企業がどんどん生まれ、同時に大学の研究も活性化されるような関係を作っていくことが期待されています。そのため、本センターの大きな目標です。

これからの課題

我が国においては、大手企業との産学連携は多くの成果を生み出してきましたが、中小企業との産学連携による成果はいまだ非常に少ないと言われています。本学の近隣には、開発力が強く、ユニークな事業を行っている実力ある中小企業がいくつもありま

*問い合わせ先
地域共生研究開発センター
事務局
TEL: 028-689-6316
FAX: 028-689-6320
E-mail: chiki@miya.jm, utsunomiya-u.ac.jp
URL: http://www.sangaku.utsunomiya-u.ac.jp/chiki/



センター長による研究紹介

センターは、「大学院」(E部門)、「コーディネーション・リエゾン部門」、「客員部門」の3部門から構成されています。大学院VBJ部門はベンチャービジネス・ラボラトリー(CBL)と先端計測分析室が協力して、ベンチャー起



金曜イブニングセミナー

す。産業の多様



栃木県39商工会に設置した技術相談窓口



那須地方のウド — 春を告げる山菜 —

名前がユニークな食材「ウド」。独特の食感、春の訪れを示す芹(せり)のような苦味から、冬から春先の野菜として、日本料理などに重宝されています。ウドは、うごき科タラノキ属の多年生草本です。もともと山のなかで、落ち葉に埋もれながら、ひっそりと生えていた食材です。春先にウドを見つけ食べた先人が、是非これを農産物にしたいと考え、そしてこれまで続けられてきた品種改良や、栽培技術の向上の結果が、今のウドの栽培につながっています。山の中で生えていたウドを、白くやわらかく育てて食べやすくする軟化栽培の技術は、歌川広重作「ぼらにウド」という作品(1832年)にウドが描かれていることから、既に江戸時代には確立していたと考えられています。



歌川広重作「ぼらにウド」(那珂川町馬頭広重美術館提供)



栃木県那須地方のウドの栽培は、1970年(昭和45年)に大田原市金丸地区ではじまりました。現在では、大田原市のみならず、那須塩原市、那須町と北那須管内全域で行われています。那須地方は、1月～3月に出荷される「山ウド」の生産がとても多いところです。これらの品種は、「坊主」、「伊勢白」、「紫」などであり、年間600トンほど生産されています。那須地方のウドは、主に東京を中心に出荷され、高い評価を得ています。今回の記事の取材では、30年近くウドの栽培に取り組まれている、大田原市の助川悦夫さんにお話を伺いました。

助川さんに案内され、ウドが栽培されているビニールハウスに入ってみると、中は完全に遮光され、真っ暗でした。そのビニールハウスの中のまた小さなトンネルと呼ばれるビニールハウスの暖かな空間で、ウドは、によきによきと育っていました。これらのウドは、このあたりで盛んに栽培されている山ウドで、数回に分けて収穫されます。

市販の栽培もののウドの多くは、植物特有の、あくやえぐみが少なくなる軟化栽培によって作られています。軟化栽培で暗くした環境下で育つウドは、緑化を遅らせ白く仕上げられるため、あくやえぐみなどは少なく、お湯で湯がく程度で美味しく食べることができます。天ぷらにしたウドは、もっと美味しいと思います。さらに、ビニールハウスの中で、掘り起こされ収穫されたばかりのウドを助川さんにすすめられて食べてみると、心地よい春を感じさせる苦味と、果物の「なし」を食べているかのような

ジューシーな食感と味が口のなかで広がりました。不思議なことに、皮ごとバリバリとウドを食べることができます。野菜って、お店に並んでいるのと、収穫直後はこんなにも違うんだと、改めて実感させられました。



遮光されたビニールハウス内のトンネルと言われるビニールをかぶせた暗く暖かな環境で、ウドは栽培されている。



本来ウドは、野生種であり、山林の落ち葉が集積したところから生えていた。那須地方では、ハウス内の底上げした圃場に、保温を兼ねた軟白資材として初穀を厚さ30cmほど敷き詰め、ウドを栽培している。収穫期には頭部を緑化させてから収穫するので「緑化ウド」と呼ばれる。群馬地方では、初穀の代わりに、土を被せているところもあるが、那須地方では初穀が主流。



収穫後のウドを食べると、心地よい春を感じさせる苦味と、果物の「なし」を食べているかのようなジューシーな食感と味が口のなかで広がる。また、収穫直後のウドは、皮ごと美味しく食べることができる(驚!)。



収穫後のみずみずしいウドを、そのまま味噌をつけて食べると、本当に美味しいらしい(なんと贅沢な食べ方……)。

助川さんのビニールハウスの外には、ウドの根株を育てている圃場があります。ウドは、もともと、水田の裏作として栽培されていました。春先の晩霜がなくなる頃から、秋の初霜以降に地上部が枯れる頃までが、根株の養成期間です。昔は、稲作の裏作として根株を育てていましたが、今はコメの減反によって、ウドの根株を育てることのできる圃場が拡大したため、その空いた圃場で、ウドの根株を大きくしています。十分に育ったウドの根株は、収穫時期を考えて、ビニールハウスに移植されます。その作業を「伏せ込み」といいます。伏せ込んだ後は、軟化栽培と呼ばれ、白くて軟らかなウドを育てることになり、伏せ込んで30日ほどで、ウドの収穫が可能になります。



根株を大きく育てているビニールハウス外の圃場。



育った根株は写真のように、根株から新芽が出ている。



ウドの収穫後、掘り起こしたウドの根株部。



上のウドの根株部から、ここから使える株を切り分け、来年のウドの栽培に用いる。

ウドの栽培は、特に圃場での根株の栽培において、雨による影響によって生育が左右されるため、安定生産に向けた技術が求められています。また何よりも高齢化によって、産地の縮小が懸念されています。それから、高齢者の方でも、ウドを作ることができるような、省力化の取組みが必要です。なによりも、ウドが那須地方で長年の間作り続けられていることを知ることが、那須地方でのウドを存続させることにつながるのではないかと思います。

(農学部 野口良造)

宇大に入学してから
気づいた
宇大の良さは何か！



学生アンケート

宇大生は 今は 今!

国際学部

- 宇大って広いなあと思った。庭園や保育園があってびっくりした。(1年♂)
- いろいろなサークルに行ってみたら、先輩の雰囲気良かった。(1年♀)
- これな良いところはない。(1年♀)
- 人の雰囲気が自分と似ている。みんな真面目。校舎がきれい。線が多い。(2年♀)
- サークルが活発。先生の雰囲気がいい。心が広い。(2年♀)
- 地域に根ざした大学である。(3年♀)
- お店や郵便局などが近くて便利。線が多くて落ち着く。(4年♀)
- キャンパスの線が美しい。(4年♀)
- 自由に使えるパソコンが多い。(4年♀)
- 放課後は部活動の音がグラウンドに響きわたり、穏やかな雰囲気。(4年♀)



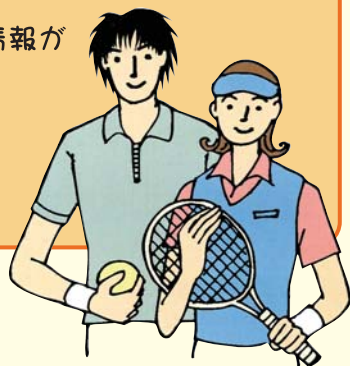
教育学部

- 学生同士仲が良くアットホームな雰囲気。(1年♀)
- 自然がいっぱいで、友達も先輩も最高なところ。(2年♂)
- 環境保全の意識を持つ人が多く、美化活動が行われていること。(2年♀)
- 図書館が大きくて、使いやすい。(2年♀)
- 休憩できる場所が意外と多い。(3年♀)
- 先輩と先生が優しい。(1年♀)
- 修学支援課等が頼りになる。(4年♀)
- 地域との交流が盛んである。(3年♀)
- 多くの学部、学科があり、全国や海外からも宇大に来ている人がいる。(1年♀)
- 24時間営業のミニストップができたこと。生協の人が優しい。学食(生協食堂)で30分程度待たなくていいこと。(2年♀)



工学部

- 活気があり、明るい人が多いので楽しい。(2年♂)
- 勉強、スポーツの環境が充実しているところ。(4年♂)
- 湯東キャンパス(五学部)と峰キャンパス(国際学部、教育学部、農学部)が近いこと。(4年♂)
- 大学の周りに遊ぶところがたくさんある。(3年♀)
- サークル活動に活気がありイベントが多い。(2年♀)
- 大学の近くに安く食べられる食堂が多い。(2年♀)
- 国際交流イベントが多く、いろいろな人と仲良くなれる。(1年♀)
- 企業からの推薦依頼が多くて、就職情報が充実している。(院1年♀)
- サークルの先輩が優しい。(1年♀)
- 部活や勉強が盛んなこと。(3年♀)



農学部

- 周辺環境に恵まれていると思います。地域の人もとてもフレンドリーで、気さくに話しかけてくれます。(1年♀)
- 人があたたかいです!!先生との距離が近いと思います。(1年♀)
- 建物に歴史を感じるところが良い。(1年♀)
- 農学部学生控室で24時間ネットができる。(4年♀)
- 講義の内容が興味を引かれるもので、楽しく聴いていられます。(1年♀)
- 学食(生協食堂)のチキンささみチーズカツ最高。夕ご飯のあはらしさにも気づかせてくれた。(4年♀)
- 可もなく不可もないところ。(3年♀)
- シトロな雰囲気で最先端。(3年♀)
- いろいろな樹木が植えられている。(3年♀)
- 線が多い(特に「ゆうゆう歩道」)。(4年♀)



サークル紹介

ていーだ太鼓

Circle pin-up

私達「ていーだ太鼓」は、沖縄の伝統芸能・エイサーをアレンジし、学内行事をはじめ、地域イベントなどで演舞活動を行っているサークルです。「ていーだ」とは沖縄の方言で「太陽」を意味し、私達サークルも、太陽のように宇大そして地域の方々に元気を与えられたらと、少人数ではありますが精力的に活動



をしています。昨年まで「MSC」という名前で活動をしていたので、「MSC」をご存知の方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

私達がこれまで出演したイベントには、宇大の大学祭をはじめ、農学部の収穫祭や3月に行われる留学生交流会、そして最近では地域企業のイベント等があります。今年で5回目の参加となった留学生交流会では、私達のエイサー演舞だけでなく、沖縄方言クイズや沖縄の手踊り・カチャーシーを取り入れることによって、会場の方々には沖縄、そし



て私達の活動をより身近に感じて頂くことができ、大変多くの方から笑顔の頂くことが出来ました!

「沖縄エイサー」と聞いて、メンバー全員が沖縄出身者かと思われる方もいるかと思いますが、創設から6年、沖縄出身者は1名のみで、残りのメンバー全員が他の都道府県の出身者や海外からの留学生という異質なサークルです。メンバーの中には、宇大に来て初めてエイサーを見たという人も大勢います。

エイサー演舞を通して、沖縄を感じてみたい人、地域の方に笑顔を届けたい人、舞台上立つ目標を持って仲間と切磋琢磨したい人、ぜひ私達「ていーだ太鼓」と青春の1ページを刻みませんか? 随時メンバーそして出演イベントの依頼を募集しています!

代表 前泊秋乃 (大学院国際学研究科2年)
連絡先: udai_ti_da_daiko@yahoo.co.jp

農学部附属農場生産品等の販売

ミニストップ宇都宮大学店及び大学生協 で農学部附属農場生産品等を販売

4月より、ミニストップ宇都宮大学店及び宇都宮大学消費生活協同組合にて、宇都宮大学オリジナル米「ゆうだい21」や、農場産生乳を使用したチーズ製品などを販売しております。また、6月23日からは、大学生協で、新たに芋焼酎「宇大浪漫」が販売開始となりました。なお、ミニストップの入口は国道123号線に面しており、どなたでもご利用になれます。大学生協は構内中ほどに位置しますが、同様にご利用になれます。



<販売品>

- 宇都宮大学オリジナル米「ゆうだい21」
- 農場産生乳使用チーズ製品各種
- うどん（乾麺）
- そば（乾麺）
- 特別純米酒「峰が丘の風」
- 麦焼酎および芋焼酎「宇大浪漫」など



※チーズ製品各種はミニストップでのみ販売。特別純米酒、焼酎は大学生協でのみ販売となります。なお、売り切れの場合はご容赦ください。

●お問い合わせはこちらまで●

宇都宮大学農学部附属農場 TEL0285-84-2424

公開研究会

教育実践総合センター教育臨床部門
生徒指導・特別活動公開研究会

平成21年度第1回

日時：8月6日（木）10時～12時

場所：宇都宮大学共通教育棟1121教室

講師：渡部邦雄（東京農大特任教授・文部科学省視学委員）

テーマ：新学習指導要領と特別活動の課題

注：今回は宇小教研特活部会（若林 匡会長）と共催です。

●お問い合わせはこちらまで●

宇都宮大学教育学部・遠藤忠研究室

TEL/FAX028-649-5393

E-mail: endot@cc.utsunomiya-u.ac.jp

保育を語る会

*参加費：200円（資料代）

第1回は終了しました

第2回 平成21年9月5日（土）9：30～

於：栃木県幼児教育センター（研修センター内）

テーマ：幼児期から児童期への教育

～生活科の実践事例から学び

の連続性を考える～

小学校1年生生活科の実践事例の発表と協議

第3回 平成21年10月24日（土）9：00～事例検討会

於：附属幼稚園

テーマ：規範意識の芽生えと協同する経験

第4回 平成22年2月6日（土）9：00～事例検討会

於：附属幼稚園

テーマ：知的好奇心と協同する経験

●お問い合わせはこちらまで●

宇都宮大学教育学部附属幼稚園 TEL028-622-9051

県民への授業公開

受講無料

国際学部では、開倫塾提供講座として国際学部専門科目「国際学特殊講義Ⅰ（国際政治と文明）」を県民の皆様に開放したいと考えています。講義を担当して下さる神長善次国際学部客員教授は、栃木県出身の外交官で、アジア、中近東の大使を歴任された方です。開倫塾のご厚意により、ぜひ県民の皆様に、外交官から見た国際政治と日本の関係を聞いていただきたいと思ひ企画いたしました。

1. 講義担当者：宇都宮大学国際学部 客員教授 神長善次（外交官として各国大使を歴任）

2. 応募方法：往復はがきにて申し込み

宛先：〒321-8505宇都宮市峰町350 宇都宮大学国際学部 久野専門職員宛

3. 募集数：30名

(1) 30名を超過した場合は教室の関係でお断りすることになります。可否については、返信はがきにて回答いたします。

(2) 応募期間 7月13日（月）～7月23日（木）

4. 授業期間および授業内容

第1日 8月10日（月）	8時50分～10時20分	10時30分～12時00分	国際政治と文明概論
	12時50分～14時20分	14時30分～16時00分	欧米政治（外交）と文明
	16時10分～17時40分		アジア政治（外交）と文明
第2日 8月11日（火）	8時50分～10時20分		アジア政治（外交）と文明（続）
	10時30分～12時00分	12時50分～14時20分	
	14時30分～16時00分	16時10分～17時40分	日本政治（外交）と文明 日本文明の国際比較
第3日 8月12日（水）	8時50分～10時20分		日本文明の国際比較（続）
	10時30分～12時00分	12時50分～14時20分	14時30分～16時00分
			演習（ex. オバマ政権と文明の検証、日本政治と文明の検証）

* 授業を実施する教室は、当日学務部修学支援課の窓口（複合施設2階）でご案内いたします。

* 授業においては、履修者の皆様の積極的な質問等を歓迎いたします。

* 車で越しになる場合は、正門の案内所にて遮断機のカードをもらってください。

国際キャリア合宿セミナー2009

9月19日（土）～21日（月）
～国際舞台で活躍を目指す若者たちへ～

国際的な仕事に求められる知識や能力。これらの仕事に至るキャリアパスを参加者自らが考えます。国際キャリア合宿セミナーに主体的に参加して、これからのキャリアを考えるヒントや判断材料にしましょう。全国の大学生や社会人など多様な参加者から、大きな刺激を受けられます！

* 講師と担当分野

- ・国際公務 国連難民高等弁務官 駐日事務所 小坂順一郎 氏
- ・国際協力NGO 日本国際ボランティアセンター職員 佐伯美苗 氏
- ・青年海外協力隊 白鷺大学教育学部教授 結城史隆 氏
- ・第三世界ビジネス (株) FAR EAST代表取締役 佐々木敏行 氏
- ・国際保健医療 国際医療福祉大学講師 石井博之 氏
- ・国際貢献企業 武田薬品工業 (株) コーポレート・コミュニケーション部 金田晃一 氏
- ・食と農と環境の国際協力 恵泉女学園大学大学院准教授 澤登早苗 氏
- ・留学・進学・インターンシップ (株) 国際開発 ジャーナル社「国際協力ガイド」編集長 新海美保 氏

参加費：18,000円 定員：110名（先着順）

会場・宿泊：栃木県青年会館（コンサレー）

URL: <http://www2.ocn.ne.jp/~concere/>

交通：JR宇都宮駅 関東バス

「作新学院駒生」（⑥⑦番のりば）200円

東中丸バス停下車（コンサレー前）

主催：宇都宮大学、大学コンソーシアムとちぎ
協力大学：白鷺大学、国際医療福祉大学、作新学院大学
共催：(独)国際協力機構、JICA地球ひろば
後援：栃木県(財)栃木県国際交流協会、(株)国際開発ジャーナル社、栃木県JICA専門家連絡会、栃木県青年海外協力隊OB会、いっくら国際文化交流会

ファシリテーター（分科会進行役）募集！！

ファシリテーターとは、参加者やその場の雰囲気、講師のキャラクターなどに合わせて臨機応変に会を誘導していく司会のことです。講師との1対1の打ち合わせをとおして、自分自身の学習を深める機会にもなります！普通の司会進行役とは一味違うファシリテーターに興味のある方はぜひお問い合わせ下さい！

●お問い合わせはこちらまで●

宇都宮大学国際学部総務係（担当：岩城）TEL028-649-5165

申込用紙請求先/E-mail: kokuca@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp 申込期間/2009年7月1日（水）～7月24日（金）

演奏会

MOMENTS MUSICAUX Vol.4

宇都宮大学教育学部音楽教育講座教員

による演奏会

日時：2009年10月9日（金）

19：00開演（18：30開場）

場所：宇都宮市文化会館小ホール

入場料：全自由席 ¥1,000

主催：宇都宮大学教育学部音楽教育講座

●お問い合わせはこちらまで●

宇都宮大学教育学部総務係

TEL028-649-5242

ふれあい祭り

第5回 学校祭

日時：10月24日（土）

9：20～14：25

場所：宇都宮大学教育学部

附属特別支援学校

内容：演技発表、中・高等部作業製品販売模擬店、PTA手作り作品販売、バザーなど

●お問い合わせはこちらまで●

宇都宮大学教育学部附属特別支援学校

TEL028-621-3871

●お知らせ●

一役職員の報酬・給与等の水準公表について
国立大学法人等の役員報酬等及び職員給与等の水準の公表方法等について（ガイドライン）に基づき、平成20年度の役員報酬・給与等の水準を公表しています。詳しくは本学ホームページをご覧ください。
<http://www.utsunomiya-u.ac.jp/jyouthoukai/index.html>



研究 Keyword

アロフェン黒ぼく土における牛ふん堆肥 無農薬コシヒカリの特徴

宇都宮大学農学部准教授 平井 英明

「土」と「壤」の意味からみた研究の方向性

土壌学研究室のシンボルマークが「壤」です。2007年度4年生の学生が作成したTシャツの胸にその「壤」の文字が黒地に白字で印字されています。この「壤」の意味は、自然の土を改良して作物を栽培することができるよう、人が耕し、肥料を加えて、手塩にかけて育てたという意味が含まれています。「土」を自然にできる「自然土」であるのに対して、「壤」は「耕作土」を意味しています。土壌学研究室では、「土」の性質を理解して、そこに手を加えて「壤」にする方法について研究を行っているということになります。そして、その研究成果を小生にわかりやすく伝達することができるよう「土壌教育教材の開発」に関する研究や地域農村に広がる水田において特別栽培米の生産を地域住民と協力して実施しています。



農学部生物生産科学科准教授 平井 英明

PROFILE

学位：農学博士
資格：環境計量士（濃度関係）
教育・研究・地域貢献のテーマ：施肥法を異にする黒ぼく土水田における土壌・イネ植物体・生産物の特性、過疎化の進む里山における在地の知をベースとした生命循環系を活用した地域活性化、学習指導要領に調和した土壌教育プログラムの開発、熱帯傾斜地における土地劣化の経済的損失の評価、有機質肥料ベースの特別栽培米生産を通じた地域貢献



田植え（那須山・写真左）。出穂と学生（同・写真上）

特徴と強み アロフェン黒ぼく土水田における有効態リン酸の周年変動と牛ふん堆肥連用の効果

アロフェン黒ぼく土は、日本の土壌の中でも最もリン酸吸着量の多い土壌で、このため、化学肥料を施用してもリン酸肥効度が容易に上昇しないという特徴を有している「低リン酸肥効度土壌」の代表格です。宇都宮大学農学部の附属農場はこの低リン酸肥効度土壌からなります。

2006年に有機農業推進法が成立し、各県がその実施計画の策定を背景として、アロフェン黒ぼく土における堆肥無農薬栽培によりコシヒカリを栽培した時のイネ植物体の特徴と堆肥施用の土壌に及ぼす効果を研究しています。現在、次のような研究成果が得られています。

リン酸の有効性は水田の湛水期間中（還元条件下）は上昇し、落水後（酸化条件下）低下する傾向にあるのが定説ですが、還元が進行するとリン酸が有効化するというメカニズム以外に、還元的な条件から酸化的な条件に移る時にリン酸が有効化するメカニズムがあることを示しました。これが新しい発見として認められました（図参照）。さらに、牛ふん堆肥の連用により根圏がより酸化的に保たれるため、リン酸が有効化しやすい土壌環境が生成し、有効化したリン酸によって、登熟に関わる穂のリン酸含有率が高まること明らかとなりました。

つまり、アロフェン黒ぼく土における牛ふん堆肥施用は化学肥料施用に比べてリン酸の有効化が促進され、同時に、根の酸化力が高く保たれ、良好な土壌環境が生成したのです。このことが、イネ植物体の穂のリン酸含有率を高め、ひいては登熟歩合の向上につながったのです。従来、低リン酸肥効度のアロフェン黒ぼく土では、多量のリン酸質肥料が投入されていましたが、牛ふん堆肥はこれに代替

するための「特別栽培米」生産に貢献することができるよう取り組みを平成20年度より開始しました。研究室の学生が播種から収穫までを、里山農家の達人に指導を受けて特別栽培米生産を実践し、そのお米をいただいています。

このプロジェクトの目的は、在地の農家の方々の様々な知恵と宇都宮大学における研究成果を、学生自身の中で融合させて新たな知を創出することにあります。

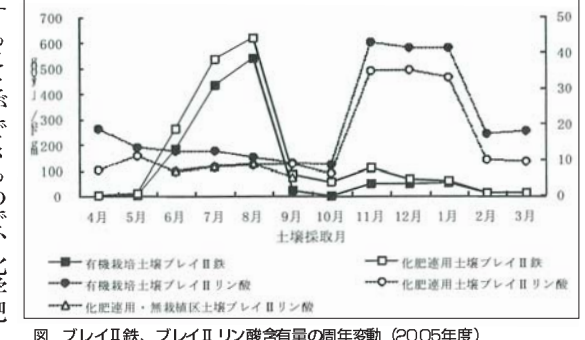


図 プレイ目録、プレイ目録リン酸含有量の周年変動（2005年度）

播種から収穫・精米・試食までを体験した後、地元の小学生に、融合した知を伝達するための「里山教科書」を製作する取り組みを行っています。この取り組みを通じて、過疎化に悩む里山農村を大学生の若い力で元気づけようと、研究室を挙げて取り組んでいるのです。

里山で好奇心ウズウズ 那須山 平井山山園蔵（下野新聞09年2月25日付より）



児童と宇大生が探索

今後の展開
那珂川流域圏における生態系サービスに関する研究
国連ミレニアムアセスメントに関する研究を雑草学、森林科学、魚類生態学、景観生態学といった異なる専門性をもつ研究者とともに学際的に研究を進めています。里山の複雑な生態系の恵みをどのような手法で解き明かしてゆくのが課題です。地域貢献に加え、世界に向けた知の発信を目指しています。

編後記
夏が来れば、思い出すのは遠かな尾瀬とは限りません。でも、つい口ずさんでしまうのは「夏の思い出」ですね。激しい太陽の下、海、空など自然を背景での思い出は、汗や涙と隣り合わせです。今回は、汗や涙と隣り合わせで芝草の五十嵐安治氏にも熱い思い出を語っていただきました。

企画・編集
宇都宮大学広報室
UU now 第18号 編集委員
編集長 渡邊 直樹
編集委員 小泉 静香 国際学部4年
鹿子澤志保 教育学部3年
眞弓 泰葉 教育学部3年
大平 准之 教育学部1年
山口佐知子 教育学部1年
増山 明恵 教育学部1年
村田 大誠 大学院1年
渡邊 泰山 大学院1年
包 海山 農学部1年
松尾 昌樹 国際学部1年
川原 誠司 教育学部1年
長澤 武 大学院1年
山本 美穂 農学部1年
佐々木英和 生涯学習教育研究センター1年
菊池 浩行 学生支援課職員
茂木 博 学術情報課職員
矢口 季之 企画広報室職員
高橋 和廣 企画広報室職員
本橋 宜久 企画広報室職員
辰巳 太郎 企画広報室職員
編集協力 ビオス編集室

広報室では、皆様の声をお待ちしております。
ご意見・ご要望などをお寄せください。
【宛先】
宇都宮大学 企画広報室
〒321-8505 宇都宮市峰町350
TEL 028-649-8649 FAX 028-649-5026
E-mail plan@miya.jm.utsunomiya-u.ac.jp

宇都宮大学
携帯サイトへGO!

2009 Summer

ウダイヲヒトク
オープンキャンパス
2009年8月2日(日)
9:00 OPEN
9:30 START
宇都宮大学
UTSUNOMIYA UNIVERSITY

UU laboratory